□追悼　北島政樹　先生□

［略歴］

1966 年　慶應義塾大学医学部卒業

1973 年　足利赤十字病院外科 部長

1975 年　医学博士号取得

Harvard Medical School & Massachusetts General Hospital の外科フェローとして 2 年間留学

1989 年　杏林大学 第一外科教授

1991 年　慶應義塾大学 外科学教室教授

1999 年　慶應義塾大学病院 病院長

2001 年　慶應義塾大学 医学部 医学部長

2007 年　国際医療福祉大学 副学長

国際医療福祉大学 三田病院長

2009 年　国際医療福祉大学 学長

2010 年　ハンガリー国立センメルワイス大学 名誉医学博士

2011 年　ポーランド国立ヴロツワフ医科大学 名誉医学博士

2013 年　国際消化器外科学会

『Kitajima Prize』創設

2016 年　国際医療福祉大学 副理事長

国際医療福祉大学 名誉学長

慶應義塾大学 名誉教授

應義塾大学医学部外科学教室

刀林会 理事長

［受賞］

ハンガリー共和国騎士十字勲章

日本消化器病学会特別功労賞

第 12 回日本癌治療学会中山恒明賞

慶應義塾大学平成 18（2006）年度福澤賞

第 14 回日本癌学会長與又郎賞

平成 22（2010）年度公益財団法人内視鏡医学研究振興財団顕彰

日本を代表する外科医として知られ，第 100 回日本外科学会会長，日本癌治療学会理事長，日本内視鏡外科学会理事長などを歴任したほか，海外でも第 42 回万国外科学会会長，国際消化器外科学会会長，世界最高峰の医学雑誌『The New England Journal of Medicine』の編集委員などの要職を務め，英国・米国・ドイツ・イタリア・ハンガリー・ポーランド外科学会名誉会員としても幅広く活躍した.

学会誌と北島政樹先生の思い出

山本　澄子[1]

すでに前号の編集後記でお伝えしましたが，国際医療福祉大学学会の初代会長であり，本誌を大学紀要から学会誌にしてくださった北島政樹副理事長・名誉学長が2019年5月21日に急逝されました．ここに学会誌と北島先生の思い出を書かせていただきます．

北島先生は2011年度に国際医療福祉大学学会を立ち上げられました．この年の9月に大田原キャンパスで行われた第1回学術大会（丸山仁司大会長）から，2019年9月の第9回学術大会（黒澤和生大会長）まで，毎年1回開催される学術大会では本学全キャンパスの教員が集まって盛大な学会が開かれています．学会設立と同時に北島先生のお考えで，それまでの大学紀要が学会誌として再スタートすることになりました．学会誌としての第1号となる2012年発行の第17巻1号では，北島先生に「国際医療福祉大学学会誌の発行にあたって　―学会と学会誌のもつ意義―」と題する巻頭言を執筆していただきました．巻頭言の中で北島先生は「各キャンパスの心を1つにすれば，本学のさらなる発展が期待できる．そこで個々の教員がもつ優れた技術や知識を共有するために一堂に会し，発表する機会が必要と考え，国際医療福祉大学学会の設立を決心したわけである」と書かれています．今年で第9回を迎えた学術大会は北島先生のお考えを十分に実現できていると思います．

学会誌について北島先生は，世界に向けて発信できる学術誌として徐々に英文論文の掲載を増やしていく必要があるといわれていました．最近の学会誌には毎号必ず複数件の英文論文が掲載されています．さらに，

[1] 国際医療福祉大学　学会誌編集委員長

留学生などの増加にともなって学会誌規程類の英文化が必要になり，学会誌編集委員会では規程類の英文化に取り組みました．本号の巻末には完成したばかりの英文を含めた規程類を掲載しております．英文規程の作成にあたりましては，大学院の赤居正美先生，医学部の Ngatu R. Nlandu 先生，総合教育センターの George C. Cota 先生にたいへんお世話になりました．この場を借りて深くお礼を申し上げます．

ここからは筆者の個人的な内容で恐縮ですが，北島先生の思い出を書かせていただきます．北島先生は手術支援ロボット・ダビンチの開発で知られるように医工連携に力を入れてこられました．筆者は工学系の出身であることから，学外の医工連携に関する会議によんでいただく機会がありました．筆者が最後に北島先生にお会いしたのは 2019 年 2 月に行われたこの会議の席上でした．会議が終わったときに，先生は 1 冊の本をとてもうれしそうに見せてくださいました．その冊子は慶應義塾大学医学部野球部 100 周年記念誌でした．冊子の中には主将でいらした北島先生のユニフォーム姿や先生の医学部長退任記念試合の写真が掲載されていました.「この記念誌は後輩たちががんばって作ってくれたんだよ」といわれたときの先生の笑顔が忘れられません．スポーツマンでいらした北島先生はいつも「生涯現役」といわれて体力作りのためにジムに通われていると話されていました．先生はジムの運動中に亡くなられてしまいましたが, お言葉通り「生涯現役」を貫かれたと思います．学会誌のことをいつも気にかけてくださっていた北島先生にこれからの学会誌を見ていただけないことはたいへん残念です．北島先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます．